

新市町村の横顔

美野里町



1. 沿革

水戸から石岡行のバスに乗り、6号国道をひた走ること1時間、地勢おおむね平坦な純農村美野里町に着く。この町は茨城県のほぼ中心に位置し、町村合併の花やかな一時、石岡市との合併問題で話題をまいたが、昭和31年6月2度にわたる住民投票の結果、堅倉竹原両村の合併が決定し、8月1日美野里村として発足し、昭和34年4月1日町制をひき、美野里町とな

つた。

旧竹原村は永録年間に大塚貞国の弟竹原義国が居をこの村の東南部に構え、附近を竹原と称していたが、天正18年佐竹氏に亡ぼされ、佐竹氏が出羽へ移った後は本村一帯の地は矢野に帰した。明治維新になるとこの地は矢野、松川、石岡、麻生の各藩の管轄に属し、明治17年に1行政区になり、同22年町村制施行とともに合併前の竹原村として発足した。一方旧堅倉村は応神天皇の頃は茨城国に属し、大化の改新により常陸国茨城評と呼ばれ江戸時代は松川、石岡、土浦の各藩に属し、明治維新後はしばしばの変革を経て、明治22年8カ村9新田で堅倉村と称し、旧村名を大字名として発足したが、大正12年新田の旧名称を削った。

美野里町は面積61.30方軒、世帯数2,693、人口15,154人(男7,401人、女7,753人)(昭和34年1月末)で筑波山系の真家山麓に源を發して町の西から南の町境をなして東へ流れる園部川と、愛宕山麓に源を發し町の北方地域を西から東へ流れている巴川の流域に水田が開け、その他は平坦な台地で畑が開け、また山林も多く点在している。

2. 産業

まずこの町の特産からあげよう。その1つは酪農でその歴史は古い。すなわち旧堅倉では昭和10年酪農組合が結成され、同15、16年頃は乳牛が500~600頭いたが、漸次飼料難で減少し、終戦直後はわづか70頭に過ぎなかつたが、次第に旧に復し、現在430頭を飼育し、牛乳の処理所が2カ所あり、日産約1,763kgの牛乳を処理している。

もう1つの特産は、いわゆる特産物としての栗の生産である。石岡市を中心とした茨城栗の生産の一翼をにない、耕地180ヘクタールにおよび、反収150kg~188kgに上る栗は、主として東京へ出荷される。ここ数年蜂による被害が増しその対策に頭を悩ませているが、なおその特色は失われないうであらう。

昭和33年度に町としては画期的な事業が遂行された。

4. 財政

昭和33年度一般会計歳入歳出予算

(単位円)

歳入	村税	地交	方公營企業及分担金	使用料及国庫	分担金及	使用料及	国庫	県支出金	寄附金	繰越金	雑収入	村債	合計	
25,785,048	14,553,166	725,215	1,800,000	332,600	2,220,726	3,044,012	770,400	1,371,455	783,912	11,000,000	62,386,534			
歳出	議会費	役場費	消防費	土木費	教育費	社会労働保	健康産業	財産費	統計	選挙費	諸支出金	公債費	子備費	合計
1,987,851	11,635,800	2,935,000	3,391,800	23,842,017	393,030	571,250	5,336,650	929,383	171,020	110,070	10,025,770	556,893	500,000	62,386,534

すなわち、この年全県を襲った異状湧水に対し、干害対策としての深井戸を県下で最初に掘ったことである。この町の灌漑には上記2川があるとはいえ、765ヘクタールの田には水不足で、結局90m以上の恒久的浅井戸を3カ所と30m以上の浅井戸を140カ所他に61カ所の浅井戸を掘り、その努力に対し県から表彰されることになつて

る。他にもう1つ、この町の農地交換分合は模範的なもので、昭和30年旧堅倉村で始め3カ年に約500ヘクタールを実施し、33年も127ヘクタールが予定され、着々実施されている。このことに対しては速く関西方面からも視察があり、町の自慢の一つとなつている。

町の農家戸数2,167戸、農家人口12,652人(男6,304人、女6,348人)耕地面積2,540ヘクタール(田765ヘクタール、畑1,501ヘクタール、樹園地274ヘクタール)で33年の米実収高は約3,000t、麦類は約2,000tにおよんでおり、白菜、西瓜、干しよ、落花生の生産も多く、最近は蔬菜に力を入れている。又変つたところでは大根、ほうれん草ごぼうの種苗が多いことであらう。

33年新市町村の指定を受け、有線放送の工事を工費1,000万、対象戸数1,000戸で始め、本年早々完成のはずである。このように見てくると、本町は農村経営にすこぶる積極的で新しい農村の道を着実に歩んでいるといえよう。従つて町の性格上商業、工業に見るべきものはないが、当町長はこの方面に意欲的で、町としては珍らしく工場誘致の条例を制定し、その一部が実つて、羽鳥副側に熊取谷石材工業株式会社を誘致することに成功した。

3. 教育文化

当町には中学校が2校、小学校が4校(分校2)あり、中学校は18学級、生徒数863名(男458名、女405名)小学校は59学級、児童は2,328名(男1,154名、女1,174名)となつている。文教には力を入れ、合併後羽鳥小学校に3教室を増築し、今年度は納場小学校に対し、第2期工事を計画中である。消防方面は、現在自動四輪車1台、自動三輪車1台、手引動力ポンプ4台、可搬式動力ポンプ11台、腕用ポンプ28台を保有し活躍している。また国民健康保険の運営は極めて良く、堅倉には合併前すでに診療所1カ所設けられており、本年の保険税の徴収も87%と高率を示している。概して当町は豊かな潤いに満ち町財政も黒字続きで、普通税の納税は実に95%であり、今後著しい発展はないとしても、その着実で平和な町作りは、当町の円満な将来を約束しているようである。

~滑川町長の抱負~

1. 町民感情の融和と健全財政の確立
2. 「新町建設計画の実施実現」

重点施策

土木消防、社会教育、産業振興、国民保険等諸問題の強化拡充。
住民の福祉増進、農業経済の向上。

豊里町



1. 沿革

この町は筑波郡の西部に位し、土浦からバスで西へ走ること約1時間、東北に紫峰筑波を眺め西は小貝川の流域に望み、田畑、山林の中に生れた町で、北部は大穂町、南部は谷田部町、東は新治郡桜村、西部は小貝川を境に結城郡石下町にそれぞれ隣接している。昔この地方は上郷、渚蒲郷、水守郷などに属し、旗本采地や幕府直轄地が入り乱れていたが文祿の検地で筑波郡に入り、明治維新後は若森県管轄を受け、その後明治4年、同8年に茨城県へ編入されたのである。昭和30年4月に上郷、旭の両町が合併して豊里町が誕生した。さらに昭和31年10月宮沼村の一部が分村編入合併して面積31.50平方町、世帯数2,152、人口11,977人(男5,917、女6,060)となり(昭和33年11月毎月人口調査)、産業開発、住民福祉の増進を期して明るく住みよい新郷土の建設のため町長を中心として力強い足どりを示している。

2. 産業

まず農業面を見ると、耕地は畑が漸然多く昔から畑作物を中心に栽培され農家戸数1,622戸、農家人口9,330人(男4,533、女4,797)、耕地面積1,698ヘクタール(田420ヘクタール、畑1,171ヘクタール、樹園地106.7ヘクタール)に達しており、(昭和34年2月冬期農業基本調査)栽培面積の多いものは大麦450ヘクタール、小麦426ヘクタール、水稲421ヘクタール、陸稲390ヘクタール、さつまいも172ヘクタール、らつかせい95ヘクタール蔬菜類166ヘクタール、工芸作物197ヘクタールなどであり、(33年冬期、夏期調査)、最近養蚕業の衰退に伴って蔬菜類の栽培も多くなり共同出荷の成果はすばらしいものがある。

次に畜産面を見ると乳牛11頭、役牛550頭、馬25頭、めん羊145頭、山羊207頭、豚1,247頭、うさぎ1,066頭、にわとり10,194羽に達し、次第に農業の有畜化が進んできた。また農業用機械の所有状況を見ると、電動機412台、三速発動機610台、動力耕うん機13台、ハンドトラクター10台、動力脱穀機859台、足踏脱穀機303台、動力糶すり機196台、製粉機358台、精米機452台、精麦機21台、噴霧機52台、人力571台、ミスト機16台、動力撒粉機20台、動力製繩機19台、動力製繩機122台、足踏製繩機74台、畜力カルチペーター168台、畜力砕土機41台、畑

用播種機77台、動力いも糠飼料15台をかぞえ、急速に農業機械の動力化、近代化が進んでいる。

この町は新農村建設計画、新市町村建設計画にそれぞれ着手しまず肥沃地と不良耕地が交錯している耕作団地が全般的に狭いので、31年度から5カ年計画で、土地の交換分合をはじめ農道改修、区画整理を行っており、すでに普通畑278ヘクタールの交換分合を完了し、機械の導入と経営合理化を促進している。また小貝川流域の改修に努め、上郷山下、川口地区の廃川地帯90ヘクタールの水田造成を企図しているが、その受益も少くないことだろう。畜産面でも33年度から農林省特別指定を受けて、肥育牛地区制度を取り入れて、地方市場からやせた耕作牛を農業協同組合を通じて年2回買入れ、4カ月肥育して東京市場へ出荷し大きな利益をあげており、豚の飼育よりも大変好評を受けている。

この地方は昔から県内有数の養蚕地帯であるが、経済事情の変化によつて養蚕農家も減少の一途をたどり、現在は510戸、年間取繭高も122トンに過ぎず、蚕糸業界の不況によつて前途はあまり楽観できないだろうから、桑園の計画的改植、生産コストの引下げ、稚蚕共同飼育所の拡充などを行つて経営の合理化を断行しなければならないと思う。

次に商工業方面を見ると、農村地帯なので昔から上郷地区を中心に発達しただけで他に見るべきものも少く、商店数259、従業者数517名年間販売額2億8,000万円、工場数は19、従業者数53名、年間製造出荷額3,000万円に過ぎない。

3. 教育文化

この町には小学校3、中学校2、高等学校1、各種学校2あつて、小学児童1,818名(男950、女868)、中学生徒756名(男385、女371)、高校生徒573名(男401、女172名)、各種学校生徒女36名に達しており、各小、中学校の施設の整備拡充を図り、上郷高校の農業教育、公民館教育を中心に青少年の社会教育の普及を進め、二、三男対策や技術改善、生活改善の向上にも役立たせようとしている。ここの国民健康保険組合を見ると上郷地区は戦前から普及しており、合併直後31年度には全村加入を実現し、住民の医療改善と無医村部落の解消に努め将来は国保病院の建設プランを立てているが前途なお程遠いようである。消防面でも四輪車ガソリンポンプ2台(3台増設予定)を有し、腕用ポンプはすべて可搬式ガソリンポンプに切替える予定。

昭和33年度一般会計歳入歳出予算

(単位円)

歳入	町税	地交付税	公営企業及び財産収入	使用料及び手数料	国庫金	県支出金	繰越金	雑収入	町債	分担金及び負担金	合計					
16,280,780	16,483,920	5,409	243,600	1,329,890	4,095,116	3,838,160	3,822,765	2,000,000	2,800,000	50,899,640						
歳出	議会費	役場費	警消費	警察費	土木費	教育費	社会労働費	保健衛生費	産経費	財産費	統計費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合計
1,659,904	7,964,770	4,773,637	2,229,046	9,869,397	383,424	779,489	7,965,424	6,409,753	119,268,540	391,852	14,387,995	100,000	50,899,640			